

〈福祉〉とは、幸せ、豊かさ。それを表現するヒントを教えてくれる人・物・事を、次の4つのキーワードに沿って紹介します。

コミュニケーション ▶▶▶ 心理的な壁をなくす、やさしさを育む

暮らす ▶▶▶ 安心できる居場所や暮らしをつくる

はたらく ▶▶▶ 自分らしく活動する、成長する

食と健康 ▶▶▶ 食を大切に健やかに生きる

暮らす # はたらく

人生の先輩が気づかせてくれた ゆるやかな“つながり”の大切さ

～介護民俗学の提唱者・六車由実さんのはなし～

高齢者のさりげない言葉に たくさん救われてきた

ある土曜日の昼下がり。静岡県沼津市内の住宅地にあるその“家”にたどり着くと、窓から笑い声が漏れていました。

そこは定員10人の小さなデイサービス「すまいるほーむ*」。3階建ての民家の1階部分が利用者に開かれています。

管理者は、この家に家族とともに暮らす六車由実さん。民俗研究者を経て2009年に介護の世界に飛び込んだという、異色の経歴の持ち主です。「介護民俗学」の提唱者と言えば、ピンとくる人も多いのでは。

その日は、4人の利用者と六車さんを含む3人のスタッフが、穏やかな時を過ごしていました。

ソファーにからだをあずけてうとうとしている利用者の腕の間には、2代目看板犬のユズちゃんがすっぽりおさまって寝ています。ほかの利用者とスタッフはリビングの中央に置かれたテーブルを囲み、一人の利用者の話に耳を傾けていました。展開を予測できないその話に時折、みんなで大笑いしながら。

六車さんは終始、フロア全体をフットワーク軽く動きまわっていました。どこにいても、利用者一人ひとりの言動を五感でとらえている様子。ベテラン介護者としての姿が、そこにはありました。

なぜ、民俗研究者だった六車さんが、介護の仕事もするようになったのか。それは、偶然のような必然のような流れでした。

研究をしながら大学で准教授も務めていた六車さんは、講演や論文執筆の依頼を受けるようになり、キャパオーバー。自分に納得できる形で仕事ができず、ジレンマを抱えていました。そこで、すべてを辞めて、静岡にある実家に戻って休息することにしたのでした。

そんななか、ハローワークでホームヘルパー2級（現在は介護職員初任者研修に移行）取得の講座があることを知り、受講します。村でのフィールドワークで、多くの高齢者から昔の話を聴かせてもらい、「聞き書き」してきた六車さんは、その感謝の気持ちから漠然と、「お年寄りに恩返しできるような仕事ができたら」と、考えていたそうです。その思いが、六車さんを介護の世界に導いたのかもしれない。

実習先の施設で利用者とかかわってみると、これが想像していた以上に楽し

取材・文 おがさわら りょうこ
小笠原 綾子

ライター・編集者としてインタビュー記事作成や印刷物の制作に携わる。表立って語られることのない個々のこだわりや小さな営みに関心がある。散歩や旅行が好きで、旅先での人やモノとの一期一会を大切にしている。



「すまいるほーむ」での一コマ。管理者の六車由実さんは「利用者さんとスタッフのみんなが、ここを心地よい場にしようとしてくれているのを感じる」と話す。「歳を重ねるとできないことが増え、そんな自分を受け入れるのは辛いこと。だからここでは『楽しかった』『生きてよかった』と、たくさん感じていただきたい。その瞬間は意図してつくれるものではなく、余裕や余白から生まれてくるもの。だから『無駄なこと』も大切にしたい」とも。